様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　3 日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520299
研究課題名（和文）メランコリーと幼年時代――フランス近代文学の根源を求めて

研究課題名（英文）Melancholia and childhood: in search of an origin of modern French literature

研究代表者
塚本 昌則（TSUKAMOTO　MASANORI）
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：90242081

研究成果の概要（和文）：

本研究は、「メランコリー」と「幼年時代」という主題の分析を通して、フランス近代文学を、従来の「絶え間ない再開の美学」とは異なった視点から把握することを目指すものである。新しい形式・美学をつねに求め、古い文学観を否定する〈断絶の伝統〉こそが、近代文学の大きな特徴とされてきた。しかし、「メランコリー」と「幼年時代」というトポスから見れば、そこには綿々と継承されてきたものが確実に存在する。本研究は、〈断絶〉ではなく〈継承〉という視点から近代文学を捉え直す試みである。

研究成果の概要（英文）：

Through an analysis of the themes of “melancholia” and “childhood”, our research seeks to understand modern French literature from a perspective which differs from “aesthetics of unceasing renewal”. The “tradition of discontinuity”, that continues to seek new forms and aesthetics, had been considered as one of the most remarkable characteristics of the modern literature. However, the examination of the topics such as “melancholia” and “childhood” reveals undoubtedly the inheritance of these topics. This study is an attempt to re-examine the modern literature, not from the perspective of “discontinuity”, but from that of “inheritance”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：ヨーロッパ文学(英文学を除く)
科研費の分科・細目：基盤研究(C)
キーワード：トポス、メディア、メランコリー、修辞学、幼年時代

１．研究開始当初の背景

研究の背景には、〈近代文学〉に対する認識が大きく変わりつつあるという状況がある。フランス革命から第二次世界大戦後までの〈近代文学〉の本質は、これまで「絶え間ない再開の美学」にあるとみなされてきた。つねに新しい形式、つねに新しい美学を求め、新たな流派を形成し、それ以前に存在する古

い文学観を否定することこそが、〈近代文学〉の大きな特徴とされてきたのである。

しかし実際には、どれほど歴史が激動の流れを体験し、どれほど社会が変わろうと、文学が探求してきた人間性には変わらない部分があるという見方が近年次々に提出されるようになった。代表的な研究としてアントワーヌ・コンパニョン『反＝近代派』(2005)、ウィリアム・マルクス『文学との訣別』(2005)を挙げることができる。その底流には、アヴァンギャルド、革新の美学、形式の革命といった言葉だけでは、〈近代文学〉が本当にもっていた潜在的な力を完全な形で捉えきれないという認識がある。そこには、普遍的な人間性の探究が、それ以前から存在する形式と言葉でつねに書きつづられてきたのであり、新たな流派の出現がもたらす眩暈にも関わらず、その営みは途絶えることなくなされてきた。〈近代文学〉が、独創性や革新性にそれ以前の文学にはなかった価値を認めたことは確かだが、同時代においては〈後衛〉とみなされ、これまでは否定的に評価されてきた作家、作品、美学を積極的に再評価することで近代のもうひとつの重要な側面が見えてくるのではないだろうか。

この問題に取り組もうとするとき、ただちに生じる困難は、人間性探求という普遍の要素と形式上の革新が、多くの作家・流派において、切り離しがたい形で現れているという点にある。われわれは、これまで〈前衛〉と〈後衛〉の錯綜した関係を研究することで、両者が二つの立場に簡単に振り分けられるような単純な関係にはないことを明らかにしてきた。〈前衛〉のようにみえながら文学の伝統を守っている部分、〈後衛〉にみえながら形式の革新をおこなっている部分が存在することがわかってきた。では、〈近代文学〉が１８世紀以前の文学と断絶しているわけではなく、その綿々たる流れから豊かな伝統を継承していることをどのようにして分析すればいいのだろうか。

本研究が着目するのは、文学の歴史において繰り返し扱われるトポスを、内容においてだけでなく、どのような形式によって扱われてきたか等、さまざまな角度から再検討するという手法である。そのなかでもとりわけ「メランコリー」と「幼年時代」に注目するのは、われわれがこれまで「フランス文学における時間意識の変化」（平成 16・17・18 年度基盤研究(B)(2)）、「フランス２０世紀文学における時間の探究」（平成 19・20・21 年度基盤研究(C)(2)）でおこなってきた研究から、この二つのテーマが人間の一生を虚構の形で扱う文学において、格別重要な扱いがなされてきたことがわかったからである。近代はあらゆる束縛からの解放、未知への冒険、個人の能力に基づく特別な喜びを可能とする反面、持っているものすべて、知っているものすべて、存在のすべてを瞬時に破壊するかもしれない環境の中に身を置くことを強いる時代である。解放と破壊という二重性は、文学においては対象を持たない悲しみに沈む「メランコリー」と、時間が経っても変質しない喜びにみちた「幼年時代」という二つのテーマによってしばしば表現されている。この二つは、近代という時代を文学の領域において研究する際の鍵になるテーマなのである。

２．研究の目的

本研究は、「メランコリー」と「幼年時代」という主題の研究を通して、フランス近代文学を、従来の「絶え間ない再開の美学」とは異なった視点から把握することを目指すものである。独創性と伝統の否定こそ、〈近代文学〉の最大の特徴にみえるが、実際にはこの文学はフランス革命以前の文学から多くのものを受け継いでいる。形式においても内容においても大きく変貌を遂げながら、フランス革命から第二次世界大戦後にかけての文学がそれ以前の文学をどのように継承してきたかを、「メランコリー」と「幼年時代」という限られたトポスに関して明らかにしたい。

３．研究の方法

研究分担者のそれぞれの専門を活かしながら、〈近代文学〉をトポス研究という視点から分析する時の問題点・発展させるべきに点について、調査を進め、研究会合をもつ。特に、(1)トポス研究の再検討、(2)ジャンルの再定義（自伝と小説）、(3)詩における「幼年時代」と「メランコリー」の分析、さらには(4)情報通信・輸送機関の変貌と(5)歴史意識の変化がこの二つのトポスの表現にあたえた可能性の検討をおこなう。新たな知見を得るため、フランスの研究者とも密接な連絡を取り合い、毎年講演会・研究会を開催する。

４．研究成果

本研究は、「メランコリー」と「幼年時代」という主題の分析を通して、フランス近代文学を、従来の「絶え間ない再開の美学」とは異なった視点から把握することを目指すものである。今回の研究では、クレオールの幼年時代、無意識、写真とメランコリーという視点から、具体的に次の視点が得られた。

(1) シャモワゾーの小説『カリブ海偽典』(2002)の翻訳・紹介を通して、カリブ海のフランス語圏文学において幼年時代がもつ特殊な意味を検討した。近代性 modernié の核心にはつねに幼年時代の価値が見出されてきた。始まりが、神的な世界ではなく、個々

の人間の生の水準で捉えられるために、その根源をなす幼年時が重要性を帯びるのである。今回の研究では、この幼年時代が歴史と結びつくとき、始めから取り返しがつかないほど汚されているという感覚、それでいて無垢な何かが保存されているという感覚が現れていることを確認した。その矛盾が原動力となって、歴史・社会・状況から受けた傷跡からいかに再生するかという問いが出されることになる。またこの主題は、「愚かさ」や「東方紀行」といったトポスとも緊密に結びついているという展望も得た。

(2) 「メランコリー」と「幼年時代」が交錯するテーマとして、「フロイトの時代――文学・人文科学・無意識」と題するコロックを主催(東京大学部文学部、2011年11月5日)、その成果の一部を『思想』2013 年 4 月号に発表した。

(3) メランコリーがイメージ、とりわけ写真に結びつくことに着目し、「20 世紀フランス文学と写真」と題するワークショップを開催(東京大学文学部、2010 年 11 月 16 日)、多彩な研究協力者とともにこのテーマに取り組んだ。20 世紀に入って隆盛をむかえる「写真小説」の核心には、写真が、ある人の存在と不在を同時に表しているという発見がある。この時の成果は、2013 年秋に単行本として出版する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 41 件）

① 塚本昌則、ヴァレリーとフロイト――奇妙なまなざしをめぐって、思想、査読有、2013、4 月号、p.243-261
② 塚本昌則、〈反逆者〉ではなく〈戦士〉として　二〇一二年秋、東京でのシャモワゾー、現代詩手帖、査読有、2013、4 月号、p.60-65
③ 中地義和, De l’emerveillement a la recherche：Georges Bataille au Japon, Critique, 査読有, 2013, janvier-fevrier, p.124-137
④ 中地義和、アントワーヌ・コンパニョン「文学は割に合う」、群像、査読無、2012、９月号、p.148-160
⑤ 多賀茂・塚本昌則・鈴木雅雄・立木康介、〈座談会〉「無意識」と生成のゆくえ(2)――20 世紀の「無意識」をめぐって、思想、査読無、2013、4 月号、p.43-80
⑥ 畑浩一郎、異国への郷愁、「出会い」の美学 ―― テオフィル・ゴーチエ『コンスタンチノープル』読解の試み ――、聖心女子大学論叢、査読有、2012、第 120 集、p.41-56
⑦ 塚本昌則、内なる対話――ヴァレリーからベケットへ、仏語仏文学研究、査読有、42 号、2011、p.155-169
⑧ 塚本昌則、散文芸術としての『シルトの岸辺』、別冊水声通信　ジュリアン･グラック、査読無、2011、p.116-136
⑨ Masanori Tsukamoto, Littérature et langage indirect chez Valéry, Fabula：la recherche en littérature, 査読無, 2011, http://www.fabula.org/colloques/document1418.php
⑩ 塚本昌則、言葉と写真――ロラン・バルトの『明るい部屋』を中心に、文化交流研究、査読無、24 号、2011、p.91-104
⑪ Masanori Tsukamoto,《La bêtise n’est pas mon fort》―― la notion de bêtise chez Valéry et chez Faubert, 立教大学フランス文学, 査読無, 40 号, 2011, p.67-79.
⑫ Yoshikazu Nakaji, Réécriture et transformation de soi：Rimbaud face au code biblico-chrétien, Comment naît une œuvre littéraire？Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques, 査読無, 2011, p.191-202
⑬ Yoshikazu Nakaji, La poétique de Baudelaire à la lumière des *Paradis artificiels*, L’Année Baudelaire, 査読無, 2011, 13/14, p.137-156
⑭ アンヌ・ヴィアゼムスキー、ジャン＝クロード・ボネ、堀江敏幸、野崎歓、シネマトグラフからエクリチュールへ――小説家アンヌ・ヴィアゼムスキー、文學界、査読無、2011、65 巻５号、p.218-231
⑮ Kan Nozaki, De l’idolâtrie au dialogue：les écrivains japonais et la littérature française, La Nouvelle Revue Française, 査読無, 2012, 599-600 号, p.130-145
⑯ 畑浩一郎、ヨーロッパとアジアの狭間にて　テオフィル・ゴーチエ『コンスタンチノープル』(1853)、仏語仏文学研究、査読有、2011、43 号、p.79-91
⑰ 畑浩一郎、『サラゴサ草稿』研究序説、仏語仏文学研究、査読有、2011、43 号、p.15-39
⑱ 野崎歓、２１世紀のフランス文学――資本・越境・記憶、神戸大学大学院国際文化学研究科異文化研究交流センター 2010 年度報告書、査読無、2011、p.76-89
⑲ 中地義和、フィクションという探求――ル･クレジオとの対話、すばる、査読無、

2010、p.174-190
⑳ 塚本昌則、言葉と写真――ロラン・バルトの『明るい部屋』を中心に、文化交流研究、査読無、24 号、2011、p.91-104
21 畑浩一郎、自分を語る旅行者　シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』、仏語仏文学研究、査読有、39 号、2010、p.25-44

〔学会発表〕（計 13 件）
① 塚本昌則、フィクション論の現在、日本フランス語フランス文学会 2012 年度春季大会、2012 年 06 月 03 日～2012 年 06 月 03 日、東京大学（東京都）
② 塚本昌則、〈中心的態度〉――サルトルのイメージ論をめぐって、東京外国語大学総合文化研究所主催の研究集会『サルトル／バルト』（招待講演）、2012 年 12 月 08 日～2012 年 12 月 08 日、東京大国語大学（東京都）
③ 月村辰雄、マルコ・ポーロ『東方見聞録』、連続講演、世紀を歩く――美術と文化、１３世紀、第４回（招待講演）、2012 年 10 月 06 日～2012 年 10 月 06 日、武蔵野美術大学（東京都）
④ 畑浩一郎、旅行者ゴーチエと変遷するトルコ、2012 年 05 月 20 日～2012 年 05 月 20 日、上智大学（東京都）
⑤ 本田貴久、La poetique de Michel Leiris、Colloque international "Soi disant - poesie et empechement"、2012 年 09 月 12 日～2012 年 09 月 13 日、ボルドー大学（フランス）
⑥ Tsukamoto Masanori, Degrés du dessin：une autre poétique de Paul Valéry, 国際シンポジウム「絵を語る――19-21 世紀のフランスにおける文学を中心に」, 2010 年 11 月 27 日, 東京大学（東京都）
⑦ 塚本昌則、ヴァレリーとフロイト――声・仮面・文化への不満、東京大学文学部フランス文学研究室主催（研究代表者：塚本昌則）による研究集会「フロイトの時代――文学・人文科学・無意識」での発表、2011 年 11 月 5 日、東京大学（東京都）
⑧ Yoshikazu Nakaji、Le poète en prose est-il moderne ou antimoderne ?、コレージュ・ド・フランス（パリ）、アントワーヌ・コンパニョン教授のボードレール・セミナー（招待講演）、2012 年 3 月 27 日、コレージュ・ド・フランス（フランス）
⑨ 畑浩一郎、ヤン・ポトツキ『サラゴサ草稿』をめぐって、地中海学会第 35 回大会、2011 年 6 月 19 日、日本女子大学（東京都）
⑩ 野崎歓、アンドレ・ブルトンと子ども、日本フランス語フランス文学会 2010 年度春季大会ワークショップ「シュルレアリスムの何が未知のままか」、2010 年 5 月 29 日、早稲田大学（東京都）
⑪ Tsukamoto Masanori、Degrés du dessin：une autre poétique de Paul Valéry、国際シンポジウム「絵を語る――19-21 世紀のフランスにおける文学を中心に」、2010 年 11 月 27 日、東京大学（東京都）
⑫ 畑浩一郎、Vingt ans de remaniements. Jean Potocki, *Manuscrit trouvé à Saragosse*、国際シンポジウム《 Balzac et alii, génétiques croi-sées, Histoires d'éditions 》、 2010 年 6 月 4 日、パリ第８大学（フランス）

〔図書〕（計 22 件）
① 塚本昌則（共著）、水声社、絵を書く、2012、p.203-233
② 塚本昌則（共著）、丸善出版、フランス文化事典、2012、p.188-191, 620-621
③ ポール・ヴァレリー（塚本昌則・訳）、筑摩書房、ヴァレリー集成 VI、2012、p.226-277
④ 塚本昌則・中村隆之、アンスティチュ・フランセ、パトリック・シャモワゾー、2012、119
⑤ 塚本昌則、中央公論新社、フランス文学講義――言葉とイメージをめぐる 12 章、2012、240
⑥ 月村辰雄、岩波書店、マルコ・ポーロ、東方見聞録、2012、p.269-291
⑦ 中地義和、河出書房新社、ル・クレジオ、映画を語る、2012、243
⑧ 野崎歓・平岡敦、白水社、フランス組曲、2012、566
⑨ ジャン=ピエール デュピュイ（本田貴久・訳）、筑摩書房、ありえないことが現実になるとき――賢明な破局論に向けて、2012、p.i-vi, 93-198
⑩ ポール・ヴァレリー（塚本昌則・訳）、筑摩書房、ヴァレリー集成 II　〈夢〉の幾何学、2011、645
⑪ Kan Nozaki, Oxford University Press, Opening Bazin: Postwar Film Theory & It's Afterlife, 2011, p.324-329
⑫ ボリス・ヴィアン（野崎歓・訳）、光文社、うたかたの日々、2011、388
⑬ Yoshikazu Nakaji, Classiques Garnier, "Je m'évade ! Je m'explique." Résistance d'Une saison enfer, Etudes réunies par Yann Frémy, 2011, p.145-158
⑭ 塚本昌則, 他、平凡社、〈前衛〉とは何か？〈後衛〉とは何か？――文学史の虚構と近代性の時間、2010、552
⑮ 野崎歓、講談社、異邦の香り　ネルヴァ

ル『東方紀行』論、2010、438

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
塚本 昌則（TSUKAMOTO　MASANORI）
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：90242081

(2)研究分担者
月村 辰雄（TSUKIMURA TATSUO）
東京大学・大学院・人文社会系研究科・教授
研究者番号：50143342

中地 義和（NAKAJI YOSHIKAZU）
東京大学・大学院・人文社会系研究科・教授
研究者番号：50188942

野崎 歓（NOZAKI KAN）
東京大学・大学院・人文社会系研究科・教授
研究者番号：60218310

畑 浩一郎（HATA KOICHIRO）
聖心女子大学・文学部・講師
研究者番号：20514574

本田 貴久（HONDA TAKAHISA）
中央大学・経済学部・准教授
研究者番号：50610292

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：